状発症時に最も高値となり，精神症状の軽快時には再び低下がみられた．

【考察】SLE における抗 P の頻度について，欧米では，12から19%で，今回の成績より低率である．その原因として，測定系の感度の違いや抗原の差，対象としたSLEの活動性の違い，人種差などが考えられる．1986年以来，今回の結果と同様に，抗 P が SLE の精神症状と関連することが指摘されているが，否定的な報告も多く，今後の検討が必要と考えられる．

4）コラーゲン関節炎経過中の顆粒球，リンパ球の動態

荒井　勝光・山村倉一郎
星野　賢一・羽生　忠正（新潟大学整形外科）
高橋　栄明
安保　　徹（同 医動物）

【目的】RA の病態に重要な役割を持つ白血球の動態をモデル動物であるコラーゲン関節炎で検討した．【方法】6週齢 SD ラットを不完全フロイントアジュバント（ICFA）とⅡ型コラーゲンのエマルジョンで免疫し，対照群は ICFA のみ，0.1 M 酢酸のみ，Ⅱ型コラーゲンのみを注射した．また関節炎発症前に G－CSF を用いて顆粒球を増加させマウスコラーゲン関節炎で経過を追った．【結果】ラットは12日目から発症し14日目に全例発症した．3日目から白血球数は増加し始め7日目がピークで約2倍となった．特に顆粒球数の増加が著しく約7倍となり，1.4倍となったリンパ球も含めいずれも14日目に対照群と同じになった．対照群は関節炎が発症せず，白血球数や分画に有意な変化はなかった．また発症前に G－CSF で顆粒球を増加，活性化させると有意に関節炎が悪化した．【結論】発症前の顆粒球を中心とした白血球の増加が，関節炎の病態に強く関与している．

## Ⅱ．特　別　講　演

「進行性神経ベーチェット症候群」
「慢性関節リウマチの病態形成における骨髄の役割」

帝京大学医学部第二内科助教授
広　畑　俊　成 先生

---

# 第66回膠原病研究会

日　時　平成10年6月24日（水）
　　午後6時～
会　場　新潟大学医学部
　　有壬記念館

## Ⅰ．一　般　演　題

1）MTX による肝不全を来した RA・amyloidosis の一例

西浦　智子・首村　守俊
若杉三奈子・黒田　　毅
高田　俊範・伊藤　　聡（新潟大学第二内科）
中野　正明・荒川　正昭
桃井　明仁・馬場　靖幸
朝倉　　均（同 第三内科）

患者：55歳女性

35才 RA と診断．40歳 DM を指摘され内服治療を開始．52歳から MTX の内服を開始．54歳腎生検から Renalamyloidosis（AA type）と診断され，この時 Ccr 34.8 ml/min であった．55歳グリベンクラミドの内服を開始．その2週後 GOT 110 IU/L，GPT 132 IU/L と上昇し，5か月後から全身倦怠感と食思不振を自覚したため，当科に入院．皮膚の黄染，眼球結膜の黄疸を認め，口腔内，右第一足指および足底部に潰瘍を認めた．GOT 217 IU/L，GPT 281 IU/L，TB 8.4 mg/dL，DB 6.0 mg/dL と上昇，このほか炎症所見，補体の低下，凝固系の異常を認め，Ccr 30.1 ml/min，Ⅳ型コラーゲン 16.2 ng/ml（基準値＜6.0）であった．

経過：薬剤性肝障害を疑い，PSL 以外の内服薬を中止した（これまでの MTX の総量は約 500 mg）．口腔内および足指・足底部の潰瘍は速やかに治癒し，食思不振も消失した．その後もトランスアミナーゼ，ビリルビンは上昇したため（TB 15.0，DB 10.6）血漿交換を行った．これ以降トランスアミナーゼ，ビリルビンは徐々に低下し肝合成能はこれに遅れて回復傾向を示した．

考察：MTX による肝障害については3例の報告があり，トランスアミナーゼやビリルビン値は軽度から中等度の上昇だが，肝不全をきたすという共通の経過をとっていた．これに対し，グリベンクラミドによる肝障害の報告では，トランスアミラーゼ，ビリルビン値の著しい上昇を認めたが肝不全にはいたらず，内服を中止すると速やかに肝機能は改善するという共通の経過をとってい